

|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | コールリッジとミル (一)                                                                                                                                                                                                     |
| Sub Title        | Coleridge and Mill (I)                                                                                                                                                                                            |
| Author           | 由良, 君美                                                                                                                                                                                                            |
| Publisher        | 慶應義塾経済学会                                                                                                                                                                                                          |
| Publication year | 1965                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.10 (1965. 10) ,p.1046(114)- 1056(124)                                                                                                                              |
| JaLC DOI         | 10.14991/001.19651001-0114                                                                                                                                                                                        |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            | 論説                                                                                                                                                                                                                |
| Genre            | Journal Article                                                                                                                                                                                                   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19651001-0114">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19651001-0114</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# コールリッジとミル (一)

由良君美

## (1) はしがき

J・S・ミルとロマン派思想との接触は、イギリス思想史上の重要問題であることは、ここに改めて申すまでもないこと  
であります。イギリス・ロマン派が、功利主義を、少くとも一つの強力な対抗思想と目し、それに対決することで、己れの  
思想的形成をとげ、また、功利主義の方も、ロマン派の挑戦を受けとめることにより、後の発展の経路に何らかの方向付け  
を蒙った<sup>(1)</sup>ことも、これまた、ことあたらしく申す必要はありますまい。したがって、イギリス中心に、文学研究と思想史研  
究との接合を目指そうとする我々にとって、J・S・ミルは、イギリスの場合の、ロマン派と功利主義の相互影響関係を如実  
に物語る一つのケース・スタディを許す像として、久しい間、注目の的となっておりました。しかし、J・S・ミルといえ  
ば、とかく経済学的ないし倫理的アプローチからのみ研究され、ロマン派といえは、文学的アプローチからのみ追求され  
てきたために、両者の間に、有効な噛み合いが成りたつておらず、悪しき分業の実例を空しく提示しているのは、甚だ遺憾  
なことであります。

これにはしかし、イギリス・ロマン主義の特殊性格も絡まっていると申すべきかも知れません。イギリス・ロマン派は、  
顕著に文学的色彩をもつものであり、この点、大陸のロマン主義とは、直ちに同列に論じえない面をたしかに持っている<sup>(2)</sup>  
らであります。大陸の場合ですと、特にドイツの場合など、ロマン派文学者の思想傾向はロマン派経済学者のそれとの間  
に、一見して明らかなほどの顕著な併行関係を保っておりますばかりか、ロマン派文学者がかなり判然とした経済学的思考  
を著作の上で示しているのであります。シュレーゲル兄弟の幾多の著述や、ノヴァーリスの「キリスト教国家 別名 ヨー  
ロッパ」(Die Christenheit oder Europa, 1799)のなかにみられる社会経済観は、ドイツ・ロマン派経済学を略述する著書のな  
かに、その名のあげられていないものはありません。でありますから、アダム・ミュラーやフランツ・フォン・バーダー  
のようなロマン派政治経済思想家の思想をモデルとすることにより、ロマン派経済学の性格規定は、かなり容易になされる  
ことができました。しかし、そのような、ドイツの場合の性格規定を、イギリスの場合に機械的に適用しようとするなら  
ば、当然、多くの無理が生ぜざるをえません。ドイツの政治経済上の後進性が可能にした近代市民社会および近代的社会観  
にたいする強烈な理論的批判は、近代市民社会の典型的完成者であったイギリスにおいては、むしろ消極的にしか現われえ  
なかつたわけでありませぬ。イギリス、フランスに比して、社会的勢力としてのブルジョアジーの成立が立ちおくれたイタ  
イツであつてこそ、その対抗勢力は旺盛となり、ロマン派は後進国の近代化理論として、政治経済思想にその才能を傾注す  
る素地と必要とがあつたと考えられます。これに反し、イギリスの場合、アダム・スミスによって大成された個人主義的経  
済学および自由主義的社会観は、圧倒的な支配的潮流を形造り、ドイツの場合のような特殊ロマン的経済学が政策的必要  
から登場してくる余地はなかつたといえるのであります。にもかかわらず、啓蒙主義ならびに一八世紀思想にたいするロマ  
ン主義的反抗は、大陸と同様、イギリスの知的感情的生活を、この時期に、強く彩つたのであり、一般にロマン主義の性格  
とされる啓蒙主義的抽象主義にたいする普遍主義的歴史主義的傾向、原子論的社会観にたいする有機体論的社会観等々を主

軸とする思想は各方面に顕著に現われ、大陸との併行関係を打ちだしている<sup>(3)</sup>のであります。このイギリスの特殊性から、ロマン派のイギリス社会経済思想への貢献は、真剣な考察の対象にされることがなかった嫌いがあり、たかだか、アダム・ミューラーやヴィルヘルム・シュレーゲルの政治経済思想と表面上一致するかに思われる言説のみをつまみ取りして、エドモンド・バークおよびイギリス盛期ロマン派の政治経済思想を輪郭づけ、そこから急に飛んで、ラスキンやモリス等の末期ロマン派にゆき、末期ロマン派の初期社会主義思想との接触を叙述するといった手法が、これまで、一九世紀イギリスの社会思想史なるものにおいて、とられてきた大体的方法であったといっても過言ではありません。

しかしこれでは、盛期ロマン派の思想史上の役割の正しい究明にならないばかりでなく、盛期ロマン派との出会いによってその思想発展に一つの大きな転回点をもったJ・S・ミルのような顕著な像を評価する場合にも、狂いが生じざるをえません。

J・S・ミルが、ヘンサムとコールリッジという定式を確立し、さきにもべた功利主義とロマン派思想との間の相互対抗的性格を明らかに指摘したのは正しかったにしても、これを受けて、たとえばコールリッジによって代表されるロマン派思想の政治経済学的側面の充分に内在的な吟味を経ることなしに、ただこの定式をふり廻し、既述のような粗末なイギリス社会思想史の素描に甘んずるならば、一九世紀のイギリス文学と思想との史的的研究は、いつまでも、互いに別個のものに留まることになるでありません。

現在までのところ、コールリッジの政治経済思想は、大陸のモデルの粗暴な適用による略述をのぞいては、未開拓の土壌のままである、と称しうるのであります。

しかし、J・S・ミルが、とくにヘンサムのような巨峰をあげて、あえてその対立像にコールリッジを選定したということと自体が、コールリッジを単に文学者としてではなく、広義の社会経済理論を抱いた思想家として、時代の精神のなかでそ

の身長を測定し、以てロマン派のイギリス思想史上の意義の確定に資しうるよう努力しなければならないことを示しているように思われます。この仕事は、J・S・ミルそのものの研究の上にも、小さい事柄ではありますがあります。

従来、イギリス・ロマン派の文人の経済観といえは、さしあたり、ド・クウインシーあたりが、そのマルサス批判をめぐって、イギリス経済学説史に登場しているにすぎません<sup>(4)</sup>。コールリッジを、もしも立ち入って吟味でき、その形而上学的表現の仮面の下の経済学的なるものを掘り当てることのできるならば、彼を中心とする盛期イギリス・ロマン派の政治経済観を評価する一つの枠が可能になり、功利主義とロマン主義との対抗関係の実体がヨリ明瞭となり、今日やや活気を呈している末期ロマン派の現代的意義の再評価の機運との間にも、関連がつくわけであります。ミル研究そのものとしても、ヘンサムとコールリッジという定式を彼は確立しながら、その定式の内容について、果して実体に迫った思想史的把握をなしていたか否かの問題も、これによりヨリ明らかになるでありません。

コールリッジの政治経済思想の研究が、J・S・ミル自身の述べた程度を超えることなく、今日まで未開拓のままであったとすれば、その理由は、ヘンサムイズムにたいする批判的対決が顕著に現われたのは、J・S・ミルにおいてではなく、すでに早くコールリッジにおいてであったことが、充分に自覚されていなかったためであったと考えられます。

さらに不思議なことには、ミルの「ヘンサム論」と「コールリッジ論」は、たしかにヘンサムとコールリッジという定式を鮮やかに打ちだしてはいるのですが、仔細に吟味してみると、そこには、ヘンサムイズムの経済学的帰結にたいしてコールリッジが果して如何なる批判を加えているかについての分析がないのであり、また、コールリッジ自身の経済社会理論が如何なるものであったかについての説明も充分に与えられていないことが分るのであります。一八五〇年に、J・S・ミルがこの二人を対置し、以後の歴史に、この二つの像は巨大な影響を投げかけるであろうと言った、その洞察の光耀の影にかくれてか、ミルの論文のもつ、この点の甘さは、思想史家の眼から逃れていたとしか思われないのであります。

たしかに、コールリッジは、二冊の経済学上の著述をもつド・クワインシー (Thomas De Quiney: *Dialogues of Three Temples on Political Economy*, 1824. *The Logic of Political Economy*, 1844) とは異なつて、経済学の名を冠した著述は書いておりません。しかし、その時代の最も総合的で独創的な体系的思索の展開者であつたからこそ、J・S・ミルの定式が成立したわけであり、この定式の内容の究明から、まず、われわれの思想史研究は始められるべきである、と思ひます。「コールリッジとミル」と題しましたのは、大略、左のごときことを考へてのことです。

そこで、以下の拙論は、まず、J・S・ミルとコールリッジ思想との接触の契機の実相を吟味するため、ミルの「自伝」の分析を出発点として、ミルのロマン派思想把握を輪郭づけ、ついで、大陸のモデルを離れてコールリッジの有機体論的社会観の内容を分析し、最後に、J・S・ミルのコールリッジ観は、今日的観点からみて、果して、コールリッジ理論の真相の把握として正鵠を射たものといえるか否かの究明を行なおうと考へます。コールリッジの思想の分析に際しては、そのフランス革命観を跡付けるといふ安易な方法をとらず、二つの *Lay Sermon* と *Statesman's Manual* および *Friend* のなかの政治経済哲学を、一八一六年—一七年のいわゆる「刻下の困窮」(existing distress) に対処せんとするコールリッジの思想的回答として読む観点を探り、そこから、コールリッジの独得の制度論的思考と経済的国家干渉の理論を抽出し、以て功利主義ならびに古典派経済学とイギリス・ロマン派経済学との間の相違を明らかにすることを志す心組みであります。

(2) ミル「自伝」とコールリッジ

J・S・ミルがコールリッジと接触したのは、「自伝」の伝えるとおり、ミルが「我が生涯の精神の危機」(A Crisis in My Mental History) と自称する時期においてであつたことは明らかなやうであります。ところで、この接触は、「自伝」そのものが、複雑な性格をその成立事情の上にもつたために、従来の取扱ひでは、どうも充分ではないのであります。そこでまず、

「自伝」そのものを吟味してみます。

冒頭において、J・S・ミルは、「自伝」の三つの目的を掲げます。すなわち、

- ① 父ミルからうけた異常な早期教育の記録。
  - ② 自己の精神発展の歴史。
  - ③ 知的道徳的發展の途上での、他人からうけた恩義への感謝。
- 「自伝は」全体で八章の構成になっているが、内容からみると三部の構成になっている。

- ① 狭義ベンサムリズム期。
- ② ベンサムリズムへの反動期。
- ③ 均衡回復期。

この三分法には、かなり強い、られたものが感じられるのであつて、「自伝」を書くべくミルを強いたものは、一体何であつたかが、興味の焦点になつてこざるをえない。文学を研究してきた者として、筆者は種々の自叙伝に興味をもつてきたのであるが、このように、極端な三分法を晩年に完成した事例に接したことは少ないといえます。

功なり名とげたものが、晩年の自己満足した心境において、悠々と筆を執るといった自叙伝は、多く年代記的な叙述法になりがちであります。自己の自我という、無限に複雑なものを、このように大胆に分割せんとする意志は、如何に論理的性癖の人物の自伝とはいえ、容易ならぬものを感じさせます。何らかの危機のあと、突如として眼前にひらけた新し、展望のみが、自己の過去・現在を大胆に分割さす視点を与えるのが通例であります。

ここから、「自伝」を始めて読んだ頃、筆者は、この「自伝」が、J・S・ミルの晩年に書かれたものであるという定説に信じがたいものを覚えておりました。さらに、ミル「自伝」の特色として、あたかも青写真のように、三分法に従つた構

成法による、精神発展の構図のみが提出されており、あらゆる具体的細部の描写が欠落していることに、異常なものを感じたのであります。たとえ「思想的自伝」とはいえ、発展の段階の生じた必然性の説明には、説得力が必要であり、その説得にはその人の唯一回性の重みを託した細部の叙述が是非とも必要なものであります。ところが、J・S・ミルの「自伝」にはそれがありません。シュローメイカーのような学者は、この具体的細部の欠如をミル「自伝」の最も著しい特徴である、としているほどであります。しかし、ミル自身が、もしもコールリッジ派との接触により、自己の精神上の危機を克服したのであれば、当然、ベンサム主義の一次階である具体的細部の無視にたいして、新しい反省を経ていた筈でなければならず、この危機克服の理由を自から正当化せんとする所に一つの力点を持つ筈のこの「自伝」は、当然、その正当化の説得のために、豊かな細部描写を必要としていた筈でなければなりません。しかし、それが確かに無いとすれば、ここには何かの作為があると考えて良いのであります。かくして、「自伝」には、その執筆時期の問題と作為の問題という二つの点がかからんでおり、これらが、「自伝」の一見明快な叙述にある複雑さを与えているといえる。この二点は、ミルとコールリッジの関係の究明にとっても決して無縁ではありませんまい。幸い、「自伝」に関する研究が、近年とみに急速に進歩した結果、この二点について、ほぼ、危なげのない判断を下せるまでになったと思われまます。「自伝」の成立事情は、意外に錯雑したものであったのであります。

「自伝」が最初に世にでたのは一八七三年であり、これはヘレン・テイラー(ミルの養女)が事実上、校訂した遺稿であります。(Autobiography by J. S. Mill, Longmans, 1783) の二四〇頁(ミルの結婚の項を叙述する部分)の脚注に、『一八六一年頃に書かれたもの』とあり、さらに二五一頁の脚注には、『ここ以前の部分は、一八六一年に書かれたか、または改訂されたものである。これ以後の部分は一八七〇年に書かれた』と断ってあったのであります。J・S・ミルの没年は一八七三年です。この脚注に従えば、たしかに、「自伝」はミルの晩年の著述ということになります。これを初版本として、以後、

さまざまの流布本ができましたが、すべて、内容はこの初版本に従ったものであり、内容・執筆時期にかんして、ヘレン・テイラーの言が額面どおりに受けとられてゆく素地を作ったのであります。

旧岩波文庫所収の西本正美氏訳「ミル自叙伝」は、この訳であります。便宜上、この版本を、「ヘレン・テイラー稿本」としておきましょう。

次に重要なのは、一九二四年にでた、ハロルド・ラスキ教授校訂の「自伝」です。(Autobiography by J. S. Mill: With an Appendix of Hitherto unpublished Speeches and a Preface by Harold J. Laski, Oxford World's Classics, 1924) この序文でラスキは、『この自伝は、ミルの晩年の五年間に書かれた。すなわち、一八一八年のウェストミンスターにおける敗北の後にある。本文から明らかなおおりの、この本の大部分の書かれた年代は、一八七〇年以降である』とのべ、『ヘレン・テイラーの加筆は明らかである。一九二二年に、サスビ書店で、ミル文書が売りにだされたことがあったが、そのなかに自伝の草稿も混っていた。その時、私が草稿を検討したところでは、ここに刊行せんとする刊本は、ミル自身が残したものより、ほぼ六頁分ほど少いと結論したい。』削除の部分は主として、父ミルと妻に関する部分である。私はこの部分を復元したいと思つたが、草稿の所有者から拒絶されたのである。』とのべた。この版本は、オクスフォード世界古典文庫という簡便な叢書の一冊としてだされた関係から、今日に至るまで最も流布されているものといつて良い。便宜上、これを「ラスキ版」としよう。

「ヘレン・テイラー稿本」が作りだした印象は、星印によって表わされた伏字箇所がある所から、完本ではないということと、ミルの晩年の作らしい、という二つの印象であったといえよう。「ラスキ版」は、これにたいして、完本ではなく、ヘレンが改ざんを加えた内容があるということ、完全な草稿が競売にでていたこと、削除箇所は「父と妻」に関する部分らしいこと、を明らかにした点で、「自伝」の文献的研究に資するところがあったわけでありまます。しかし、その一方、ヘレンが「一八六一年—一八七〇年頃」とした執筆時期の問題を、「晩年の五年間に書かれた」という言辞で、さらに極端な晩

年執筆説を造りあげてしまった面もあったわけでありませう。ラスキは、その根拠として、「本文から明らかなおりと」を述べているのですが、どういう点で「明らか」なのか、何らの論証も加えておりませう。しかし、ともかく、晩年執筆説を更に抜きがたくした点で、ラスキは「自伝」の伝説を強化した罪がある半面、ヘレンの作為を指適し、草稿の存在を明記した功はあったといえませう。

かくして、「自伝」の散逸した草稿の探索が行なわれ、その結果、おなじ年に、コロンビア大学のコス教授の校訂になる草稿が出版されるに至りました。(Autobiography of J. S. Mill, published from the original Manuscript in Columbia University, with a Preface by John Jacob Coss, Columbia U. P., 1924.) この草稿には、ヘレンの自筆で『J. S. ミルの自伝。本人の筆になるもの。我が死ののち、一年以内に、一切の改ざん・削除を加えることなく、刊行すべし』とある。これにより、コス教授は、これこそミル「自伝」の完本であると考えたのも無理はありません。しかし、この版本でも、「ヘレン・テイラー稿本」の削除箇所は全部埋まりませう。岩波文庫が一九六〇年に新訳として刊行した朱牟田夏雄氏訳「ミル自伝」(早坂忠氏「解説」)はこの版本によるもので、訳者朱牟田氏は、この版を以てしても削除箇所が埋まらないことに、素直な疑問を投げかけておられます。これを「コス版」としておきます。

ラスキの調査が正確を欠いたものであったと仮定しても、どうしても、まだ別に草稿があるのではないかと考えられていました。果して、一九六一年に至って、ステイリンガー氏による「ミル自伝初稿」が刊行され、これで始めて、ミル「自伝」の草稿類と刊本類が出揃い、「自伝」の複雑な成立事情が解明される糸口が得られたわけでもあります。(The Early Drafts of J. S. Mill's Autobiography, ed. by Jack Stlinger, Univ. of Illinois, 1961.) これを「ステイリンガー版」としておきます。

「ステイリンガー版」の出現により明らかになったことは、ミル「自伝」の本来の原稿には二種類あったこと、「ヘレン・テイラー稿本」とこの二種の草稿との対比から、作為といっても、ミル自身およびミル夫人ハリエットの手による変更とヘ

レン・テイラーの削除・改変との二つがあること、初稿の起草された年代は、従来の定説よりも、はるか以前に遡ること、などであります。

ミル自身の手になる二種の草稿とは、

- ① 「自伝」初稿……「ステイリンガー版」(本邦未訳)
- ② 「自伝」最終稿……「コス版」(朱牟田氏訳本)

の二つであり、この②を、ミルの断り書きを無視して勝手に改ざんして稿本を作製の上、出版したものが、

- ③ ミル「自伝」初版本および流布本……「ヘレン・テイラー稿本、ラスキ版」(西本氏訳本)

であります。かくして、この三つの「自伝」稿本が版本として出揃うまでに、実に八十八年の歳月が経過したことになります。この間、日本におけるミル研究は、③を主なる底本として進められてきたわけであり、従って、ミルの人格形成の複雑な実体は無視されたまま、ミルの思想構造が研究されるという片手落ちに陥ることになったのであります。

(\*) 「自伝」初稿・最終稿・ヘレン・テイラー稿本」の三草稿は、ヘレンの姪であるメアリ・テイラーに遺贈され、一九一八年にメアリが死に、既述の競売に付され、一九二二年にラスキの目にとまったものとみられる。競売の結果、マッグズ・プロスなる人物の手におちたが、それから一年ほどして、プロスはこの三草稿を、バラバラに売却したのである。「最終稿」はコロンビアのコス教授が入手され、一九二三年に同大学に寄贈された。「ヘレン・テイラー稿本」は、一時、行方不明であったが、一九五九年に、マンチェスターのライランズ図書館の手に入った。「初稿」は、マッグズからジョンズ・ホプキンス大学のホランダーの手におち、一九五八年に、イリノイ大学の所有となった。なお、ホランダーは、この草稿の性質につき検討を加え、一九二三年に、ジョンズ・ホプキンス大学思想史クラブにおいて研究発表をしたという記録があるが、その内容は公表されていない。cf. Studies in Intellectual History—Festschrift to A. O. Lovejoy, Johns Hopkins, 1953.

本論文の原型は、慶応義塾思想史学会第三回例会(昭和四〇年六月一九日)において、「J・S・ミルと有効性のかなた」と題して発表を試みたものである。当日、時間的制約から省略せざるをえなかった部分を復元し、より内容にふさわしく改題したものが、本論文である。当日、会員諸氏より加えられた多くの質疑は、書き下すに際して、極めて有益であったことを、感謝を以て付記したい。

(1) ロマン派と功利主義との思想的対抗関係は、明白な事実でありながら、英文学関係の研究書で、この点の自覚を明瞭に打ちだしたものは皆無である。Alfred Cobban: *Edmund Burke and the Revolt Against the 18th Century*, 1929. は反一八世紀思想として定式化しているために、著しく平板である。

- (2) 篠田浩一郎「フランス・ロマン主義と人間像」未来社、一九六五、七一―二四頁参照。
- (3) René Wellek: *Comparativisms*, 1965 参照。ウエレットの独断的裁断が、この場合、この併行関係の大綱を、かえって明らかにしている。
- (4) たとえば、小泉信三「アダム・スミス、マルサス、リカアドオ」岩波書店、一九三四。
- (5) Wayne Shumaker: *English Autobiography*, 1954, pp. 142-157. 参照。

資料

最近のゴドウィン研究文献

——特に *Godwin's Letters of Verax* by B. R. Polin について——

白井厚

一九六四年八月末に拙著「ウィリアム・ゴドウィン研究」を出版して以来、まだ一年を経るに過ぎないが、その間いくつかの研究や従来知らなかったゴドウィンの著作のリプリントが現われた。その多くはニューヨーク市立大学 Bronx Community College の Burton Ralph Polin 博士の手によって精力的になされてゐる。ポリン博士はニューヨーク市立大学出身、古典語と英文学を専攻し、一九六二年コロンビア大学で博士の学位を得た。妻は Dr. Alice Polin でスペイン語の教授。彼は現在ゴドウィン、キーツ、シェリについて研究、特にシェリらのロマン主義運動との関連、および教育哲学の二点から、ゴドウィン研究を進めている。また、外国語の論評や際物的なものも含めて、ゴドウィンについての利用しうるすべての資料を検討しようと企て、アメリカ、ヨーロッパの図書館を遍歴、約六千の資料を得たという。そのほとんどは従来知られなかったもので、たとえば、露、独、仏、伊、西、スウェーデン、ポーランドなどの無政府主義関係の資料からのものも多い。彼はこれに注解と詳細な索引を付け、近く約二千ページの大著 *An annotated bibliography*

最近のゴドウィン研究文献

*of 4000 items on and allusion to William Godwin* として出版の予定である。

彼の主著は *Education and Enlightenment in the Works of William Godwin*, 1962, N.Y. で、理性—人間の基本的特質、無限の進歩—完全可能性説、一般教育の排斥、啓蒙者としてのエリート、ゴドウィンの小説における教育と啓蒙、文献目録、という内容を持つ。この書で彼は、古典および十八世紀の英仏の思想を一つの新しい思想に融合させたゴドウィンの複雑な才能を示そうとし、進歩理論、自由な理性の使用、近代小説、とりわけ知的エリートの役割についてのゴドウィンの大きな貢献を描く。彼からの手紙によれば、啓蒙された社会における社会改革の要因としてのエリートの強調について、誤解されていた点を明らかにすることがこの書の要点であり、また新しい点である。彼は、F. E. L. Priestley から多くの資料を得ているが、ゴドウィンのプラトニズムを強調するブリストリ説には同意していない。

次にゴドウィン研究を中心に彼の主な業績を記すと、

二五 (一〇五七)